

日独交流 150 周年記念特別講演会

ヴォルフガング・ティールゼ  
ドイツ再統一の20年 回顧と総括

出口 雅 久\*  
荒西 麻 記 子\*\* (共訳)

[ 訳者前記 ]

本稿は、2010年12月8日(水)に立命館大学法学会主催、同大学国際平和ミュージアム・同大学国際地域研究所・大阪・神戸ドイツ総領事館共催で開催されたドイツ連邦議会副議長ヴォルフガング・ティールゼ氏による日独交流 150 周年記念特別講演「ドイツ再統一の20年 回顧と総括」の講演原稿の内容である。本学会誌に掲載を許可していただいたティールゼ副議長およびその仲介の労を取っていただいたドイツ総領事アレクサンダー・オルブリッヒ博士に衷心より感謝申し上げる次第である。ティールゼ副議長は、1990年に当時の東独 SPD 党首、ドイツ連邦議会議員を経て、1990年には SPD 副党首、1998年にはドイツ連法議会議長を歴任され、2005年から現職にある。

ティールゼ副議長は、これに先立って、本学国際平和ミュージアムに高杉巴彦館長および安斉育郎名誉館長を表敬訪問され、その後、本学国際平和ミュージアムで本学学生が毎年企画している「不戦の集い」において、川口清史総長、上田 寛副総長(当時)ほか、本学理事会役員と短時間ではあったが有意義な懇談をすることができた。ティールゼ副議長による献花の際には、ドイツ再統一について言及され、平和の重要性について極めて印象深いご挨拶を賜ることができた。私は今年で本学に奉職して20年となるが、外国の現職の政治家が本学の「不戦の集い」に参加されたことは、私の記憶のある限り初めての出来事であり、画期的であったと考える。

当日、存心館法廷教室で開催された講演会には100名以上の教職員・学生・院生が参加し、本学のドイツ関連の専門家によるドイツ語による極めて活発な質疑応答

---

\* でぐち・まさひさ 立命館大学法学部教授

\*\* あらし・まきこ ドイツ語通訳・翻訳者

も展開され、予定されていた時間をオーバーするほど大変盛況であった。なお、翻訳および通訳は荒西麻記子さんに担当して頂いた。最後に、今回のティールゼ副議長の講演会でお世話になったすべての関係各位に記して感謝申し上げる次第である。

2011年1月22日

立命館大学法学部教授 出口雅久

ご来場の皆様、親愛なる学生の皆様、

今年、ドイツ連邦共和国は、二つの歴史的に重要な出来事を祝いました。10月3日にドイツ統一20周年、そして(1990年)12月2日に統一ドイツでのドイツ連邦議会選挙20周年です。この連邦議会選挙は、壁の崩壊後わずか1年後に行われました。これは、ドイツ連邦共和国の発展が、ようやく東部ドイツの市民と共に決定され、共に形作られることになった表れです。

あれから20年、これは一世代の期間に当たります。私が1990年、何百万という人たちと同様に感じた喜びと大いなる感謝の気持ちは、今日まで完全に薄れてはいません。1990年10月3日、ドイツ統一の日は、天からの贈り物ではなく、苦勞して手に入れた平和革命の結果であり、我が国民の歴史上、他に例を見ないものでした。それまでもドイツで革命はいくつかありました。しかし、今回のように、血を流すことなく成功を収めた上、ヨーロッパ全体で共感を持って迎えられた革命はありませんでした。これは、歴史的な奇跡でもあったのです。

1989年の夏の終わりから秋頃になると、ライプツィヒやその他の町で週を追うごとに人数が増えていくデモで、東ドイツの市民から不安が消えていきました。その不安とは、独裁政治に権力を半分握られているということ。と同時に、デモ参加者は、自分たちの言葉を、勇気を再び取り戻したのです。「われわれが国民だ!」という叫び声は、新たに目覚めた自意識の表れでした。

1989年の市民社会が始まる背景には、ドイツ民主共和国の国内での勇気ある先駆者の存在があります。それは、市民権運動家であり、反政府グループでした。彼らの数が当初非常に少なかったことを考えると、彼らの勇気と知性は一層偉大であり、尊敬に値します。平和、環境保護、民主政治、人権、基本的自由 - これらは、彼らが掲げた課題、目的、そして価値でした。

市民権運動家は、まずドイツ民主共和国の改革を支持したため、秘密情報機関による解体措置や拘留、国籍の剥奪というリスクを冒さなければなりません。彼らは、早い時期から、キリスト教の教会の庇護の下で組織化していきました。この集団の中から、1989年、新たなイニシアチブと政党の設立者が生まれたのです。

自己の信念を主張する勇氣は、時がたっても色あせることはありません。ドイツ民主共和国における市民権や教会のグループ、平和や女性運動に参加していた勇氣ある女性と男性は、今日でも尊敬に値します。彼らは、独裁政治の墮落を目に見えるようにしてくれただけでなく、自らが手本となって、多くの人にじっくり考えること、そして考え方を変えるきっかけを与えてくれました。

ご来場の皆様、

ドイツ民主共和国で平和革命が成功したこと、自由と統一が可能になったこと、これは押し付けられたことでも、「法則どおり」になったことでも、論理にかなったことでも、不可避なことでもありませんでした。これには、数々の歴史的な先駆者を必要としましたし、様々な出来事と状況と権力が、共に作用し合うことも必要でした。

ここで必要だったのは、

欧州安保協力会議の過程、すなわち西側の緊張緩和と政策による冷戦の克服  
サハロフからソルジェニーツィンに至るまでのロシアの異端者たち  
チェコスロバキアの憲章 77 というお手本（私の「政治の聖人」であるヴァーツラフ・ハヴェルの著書「真実に生きる」は、ドイツ民主共和国に住んでいた頃の私にとって最も大事な政治の書物でした）  
ポーランド人のカロル・ヴォイティワ教皇（そして、彼が1979年にワルシャワを訪問したこと）  
ポーランドの反体制運動（自主管理労組）「連帯」の力、忍耐、そして規律正しい勇氣に始まり、円卓会議という壮大なことまで考え出したこと（そして、「連帯」もまた、カトリック教会なくしては存在できませんでした）  
ハンガリーの改革共産主義者の知性（国境を開放した人たち）  
ゴルバチョフのペレストロイカ政策（幸いなことに、ドイツ民主共和国に駐留していたソ連軍兵士は、東ドイツのデモ参加者を抑えるのに動員されませんでした）  
SED（ドイツ社会主義統一党）の政治が、経済的にも道義的にも壊滅状態で

あったこと(最初から最後まで失敗ばかりの政治)

(先ほど話をしたように)反体制集団の自己の信念を主張する勇氣,旧東ドイツ市民が感じていた幻滅,不安の克服

最後に,西側の政治家たちの行動力(ヘルムート・コールからジョージ・ブッシュ・シニア(第41代米国大統領)に至るまで)

これらの条件が同時にそろって初めて,ドイツ民主共和国の存在理由が消耗され,破壊されたことが明白かつ有効になったのです。ドイツ民主共和国は,一度だって自国のアイデンティティーを持ったことはありませんでした。あったのは,一方で,ソ連帝国の西の歩哨としての安全上と権力政治的な存在理由であり,他方で,常に厄介で,常に不安定なイデオロギーのアイデンティティーであり,最初は反ファシズムに,やがてマルクス・レーニン主義のイデオロギーに由来するものでした。

私たち東部ドイツの市民を20年前に奮い立たせたものは,何百回となく繰り返し示された気概,自己の信念を主張する勇氣,空想力,創造性,そしてウィットでした。自信を得たことで,未知のエネルギーが放たれ,調整を要する社会と政治に関わる事柄を自らの手に掌握することを可能にしたのです。それまで広く散らばっていた市民社会が組織化されていきました。すなわち,新しいイニシアチブ集団と同盟が,村で,町で,国家で,政治的責任を引き受けたのです。そして過去の権力者たちは,次第に公職を失っていきました。この「革命的な時期」には,至るところで急務の問題を調整すべく円卓会議が開かれ,社会のすべての集団に属する人たちがこれに参加しました。

私自身は,1989年に新フォーラムに参加するようになり,その後1990年1月,市民権運動家によって新たに設立された党,東側のドイツ社会民主党に加入しました。その数ヵ月後には,私はもう同党の党首に選ばれました。革命的な時代には,このように息をのむような速さで,経歴がどんどん塗り替えられていくのです。

デモ参加者が1989年秋に出した要求は,1990年3月18日,正式に民主主義的な権利となりました。この日,東ドイツで初めて自由な議会選挙が行われました。ドイツ民主共和国で成人となった市民は,この日,全く新しい経験をしました。投票用紙に書いたバツ印は,本当に価値をもっていたのです。彼らは,第10回にして最後の人民議会を選出しました。そして,この議会がこのようにお決まりの名前で呼ばれるのは当然と言えます。60年弱という期間と,2つの独裁政治を経て,東ドイツの市民は初めて,民主主義的な手順に則り,自国の政治形成に影響を持つことがで

きたのです。彼らが何を選んだかは、ご存知の通りです。議会制度による民主政治と、ドイツ統一です（私の父は、一生のうち一度も自由選挙に参加することができませんでした）

ご来場の皆様、

1990年3月18日の選挙は、重要な転機となりました。この選挙は、革命的な段階に終わりを告げ、議会制度の扉を開いたのです。基礎となったグループ集団や運動は、政党になりました。まだ「最初の有権者」であった一般の市民が、国会議員や次官、大臣になったのです。私も、自分がいつの日か民主主義の議会に入ることになるとは、昔は想像すらできませんでした。

有権者が議会に課した任務は明白でした。それは、ドイツを統一すること。新たに現実社会主義的な政治上の実験には、国民の大多数は興味をもっていませんでした。答えられるべき問いは、この有権者の委任を、西ドイツ基本法の第23条か、第146条のどちらで実行に移すことができるのか、というものでした。協議で決定された方法は、迅速な編入を実現するが、その前に交渉することでした。これは、実際のところ、ドイツ分断を早急に克服する唯一現実的な道でした。

人民議会には、自主決定に基づいて、その歴史的責任を認識した上で国家統一を完了するまで、たったの6ヶ月しかありませんでした。莫大な調整作業が必要とされました。政治上、形成が最も困難かつ複雑極まりない領域は、経済と通貨と社会の統合、権利の同化、そしてシュタージ記録法でした。つまり、ドイツ民主共和国の秘密情報機関が後に残したものをどのように扱ったらいいのか、犠牲者に書類を開示するか否か、という問題でした。

編入決議は、統一条約の締結と2+4交渉の後、ようやく下されました。議会は、第二次世界大戦の4つの戦勝国（ソ連、アメリカ、フランス、イギリス）と、近隣諸国と一致団結して統一へと前進したかったのです。これは、実行に移されました。

ご来場の皆様、

今日、この編入が、同じ権利を持った者同士の統一ではなかったと批判する人がかなりいます。確かに、対等な者同士の統一ではありませんでした。ドイツ民主共和国の経済は、1990年時点でもうすでに地に落ちていましたし、その後の数ヶ月で完全に崩壊しそうになっていました。そして見落としてはならないのが、ドイツ民主

共和国の国民の大多数が、早急な政治的統一を望んでいた、ということです。さらに大事なことは、当時の外交的かつ国際的な状況で、統一が許されるのにどれほどの時間があるのか、誰も予見できませんでした(1991年8月のゴルバチョフに対するクーデターは、二つの分断されたドイツの統一が国際的に承認されるのには、場合によっては、わずかな期間に限り可能なかもしれない、という懸念を抱いた人たちの見解が、後になって正しいと判明したことになります)。

当然のことながら、この何ヶ月間には、間違いや怠慢、また過大な要求がありました。しかし、他にどうすれば良かったのでしょうか。民主政治の議会自体を不要であるとして、自分自身とその国家を廃止する方法、しかも許容できる条件でこれを実現する方法を説いた教本など、どこにもなかったのです。

その短い委任期間にもかかわらず、1990年に自由選挙で選ばれた人民議会は、ドイツ議会主義の歴史に重大な一章を記しました。独裁政治と民主政治との間を埋めるだけの議会以上のものでした。この議会は、1989年と1990年の平和革命を回顧したときに東部ドイツの市民が誇りに思える実績の一つに数えられます。いずれにしても私にとって、1990年の3月から9月までの月日は、人生で最も興奮した時期であり、20年がたった今でも、この時期をいくらか誇りに思っています。

ご来場の皆様、

1990年のドイツ統一のプロセスは、国内と海外の両方で息をのむような速さで進められました。また、最初から、ヨーロッパ的な視点で考えられ、形成されました。ドイツ統一条約の前文に書かれているように、ドイツ統一は(以下、引用)、「ヨーロッパの統合に貢献し、境界によってもはや分断されない、すべてのヨーロッパ市民に信頼に満ちた共生を保障するようなヨーロッパの平和秩序の拡大に貢献するために」努力する中で完結する、と書かれています。言葉を換えれば、ドイツ統一とヨーロッパの統合過程は、過去も今もメダルの両面なのです。

ご来場の皆様、

私たちが以前想像あるいは期待していたのに反し、憲法(ドイツ憲法、つまり基本法第72条)に規定されていた東と西における「対等の生活環境の創造」には、1990年に私たちが望んでいたのより、あるいは言い聞かされていたのより、またはいくらか軽率にもっともらしく約束されていたのより、ずっと多くの労力と忍耐と時間が必要であることが次第に分かってきました。

1990年以降、東部ドイツの市民は、劇的な大変革を何年も経験することになりました。ダイナミックな経済変革の過程、東部ドイツ製品に対する販売市場の始まり、信託公社の問題のある行状(信託公社の任務は、国営企業の民営化でした)、何千という企業の整理、何十万という職の喪失は、多くの人に、強い不安感を呼び起こしました。その後、1990年の中頃以降に停滞期に入り、最初は急速に伸びていた東部ドイツの経済成長が行き詰まると、東は、文字通り、「窮地に」立たされたのです。

多大な政治力が発揮されたおかげで、危機は克服されました。ここ10年間は、継続はしているものの、回復のスピードが明らかに遅くなったのがわかります。

市民経済指数から明らかなのは、ドイツ統一以降、どれほど目を見張るような前進が見られたのか、ということです。住民一人当たりの国内総生産は、1991年には、ベルリンを除く東部ドイツの州で、ドイツ西部の水準の三分の一でした。2009年までに、この数値は、73%にまで上昇しました。似たようなことが、生産性についても言えます。ドイツ統一直前には、西の水準の約25%であったのに対し、2009年には、ほぼ75%になったのです(いずれの尺度においても、同化は停滞気味です)。

これらの数字が証明していることは、まさに過去20年間に於いて、ドイツ全体でなされた多大な努力のおかげで、多くのことが達成できたということです。特に成功を収めたのは、かつては崩壊の危機に瀕していた東部ドイツの町、例えばゲーリッツ、ライプツィヒ、ロストック、ベルリンの再建であり、コミュニケーション網と交通インフラの近代化、保健衛生制度、そして莫大な環境汚染廃棄物の処理でした。これらの領域では、実に多くの事柄が変わり、良くなり、より生きるに値するようになったのが感じられます。

東部ドイツの経済は、たとえば輸出部門の成長から見て取れるように、遅れを取り戻すため、大変な近代化プロセスを歩んできました。2008年には、輸出の占める割合は20%になり、ドイツ西部の34.5%よりは明らかに低い数字ではあるものの、差は縮まっています。輸出品は、東部で2002年から2008年までの間だけでも、130%弱増加しているのに対し、西の増加は約60%に留まっています。同化プロセスの特に際立った例は、自営業者の数に示されています。2007年時点ですでに、東と西の自営業者は、同じ数になりました。また、加工業での成長も著しいものがあります。2000年以降だけでも、東部ドイツ産業の付加価値は55%です(ベルリンを除くと64%)。ただし、企業の規模は西よりは小さく、従業員数も少ないです。



政治の舵取りと東部の再建促進において、修正の効果が表れてきました。公的資金を、如雨露で水をやるように分配し続ける代わりに、今では成長の中心部と、はっきりとした経済的ポテンシャルを示している、いわば「灯台」のような地域の発展に使われるようになりました。将来有望な産業を有するこれら生産性の高い中心地は、今日、地域経済強化の出発点です。ここでの生活状況は、ドイツ西部の州の状況に非常に近づいています。

東部ドイツには、今では様々な専門分野で、経済の中心地や将来性のある地域があります。それは、エネルギー・環境技術、情報・コミュニケーション技術、ナノテクノロジー、新素材、バイオテクノロジー、健康科学研究、医学技術、さらに光工学などの分野です。

とりわけ、「再生可能エネルギー」の分野は、文字通り、雇用の原動力へと発展していきました。たとえばソーラー産業では、東部ドイツの企業は、全体の付加価値の流れに沿って、研究開発と製造を行っています。以前どこかで読んだことがあるのですが、今では太陽電池の6個に1個が、東部ドイツで作られているそうです。東部ドイツは、ソーラーテクノロジーにおいて世界的に重要な拠点となりました。

ここで1つ、特に良い例を挙げましょう。以前、旧東ドイツで三箇所の化学重点地域に拠点を置いていたタールハイム市の企業Qセルです。この会社は、太陽電池の開発、製造、販売に特化しました。2001年に製造を開始したときの従業員数は19名、2002年の売り上げは1700万ユーロでした。2008年にはすでに従業員数は2500名、売り上げは13億ユーロにまでなりました。この企業の経済的な成功、非常に優秀な労働力への需要、中堅の下請け業者や職業訓練機関、大学や研究機関との継続的な協力関係、こういったこと全てが地域全体に良い影響を与えたのです。これにより、いわば自立的な経済発展構造が出来上がりました。かつては化学の中心地として環境汚染に苦しんでいた場所は、今では「ソーラーバレー」になりました。これこそ、未来の東部です。

ご来場の皆様、

それでも、東部ドイツの経済力が今でも立ち遅れている理由の一つは、伝統的に大規模な資金力のある企業の数比較的少ないことです。ドイツ民主共和国の国営企業を民営化し、新たな企業を設立したことで、東部の工業会社の圧倒的な数が、今日、外部の所有者に帰属することになりました。ですから、東部の経済は広範囲で、



いわば「支店経済」です。東部ドイツの生産の四分の一は、公的資金の移転で保護されています。1991年以来、正味約1兆ユーロの公的資金が東部ドイツの経済に流れ込んでいきました（インフラ整備、社会保障制度、企業のため）。専門家は、これを「資金移転エコノミー」と呼んでいます。

これに留まらず、いまだ不足しているのは、私経済的な産業研究です。公的資金で賄われている研究基盤施設（つまり大学）は、格段に良くなりました。しかし、東部ドイツでの研究開発への民間投資は、わずか5%です。従って、東部ドイツ経済の繁栄のためには、将来有望な専門分野の開発と定着が、一層重要になっています。ソーラー産業の場合のように、ここで、新しい、独創的な産業の研究と生産能力を築き上げるのです。ここでも、将来の鍵を握っているのは、教育と研究であると言えます。

ただし、つい最近決議されたドイツの原子力発電所の稼働期間延長は、東部にとって、経済的な観点からすれば、非常に問題があります。今までのような、環境面でも必要となる再生可能エネルギー産業の進展が、これにより妨げられるからです。持続する自立的経済発展に至るのは、これからさらに難しくなります。

ご来場の皆様、

過去20年間に、確かに多くのポジティブな発展が見られたものの、私たちの目の前には、引き続き大きな挑戦が立ちはだかっています。長期的な失業の影響、切迫した高齢者の貧困、絶えない移住、住民の高齢化（西よりも多人数）。これらは、私たちが取り組む問題のほんのいくつかです。

東部ドイツの市民の公平さの感情において、特にしゃくに触るのは、今でも西に比べると明らかに低い給与水準です。たしかに、同化はかなりの程度進みましたが、まだ完全ではありません。現在、東部の労働者の平均賃金は、西の水準の約80%に相当します（1991年時点では、約50%でした）。ついでに言うと、協約賃金が支払われている会社では、すでに西の水準の90%以上に達しています。

今でも最大の課題は、かなり改善されたとはいえ、失業問題です。金融・経済危機が起こる前、2005年から2008年までのわずか3年間の景気上昇期に、失業はほとんど半分にまで減りました。二度の景気対策と、さらにもう一つ大事な操業短縮制度のおかげで、経済危機の最中でも多くの雇用が守られ、ドイツ全体の失業が減少しました。

2010年11月、東部ドイツの失業率は10.7%、2005年には、年平均でまだ20%を超えていました。これはいい傾向です。しかし、東部の平均失業率は、今でも西の2倍近くあります(西では11月は6.0%でした)。就職の問題と社会参加に対する機会の問題は、統一のプロセスを経済的な面だけでなく、精神的、社会的、文化的な意味で進める上でも、決定的な要因であるといえます。

客観的に現状をまとめてみると、経済的かつ社会的な成長・同化プロセスの速度は低下し、これから進む道は、相変わらず険しいと言えます。

ご来場の皆様、

ドイツ統一は、最初からドイツ全体の挑戦であり、その結果は、非常に実践的でした。そしてこの記念の年に、私は、感謝の気持ちを持って思い出したいことがあります。それは、西部ドイツの人たちが新たに加入した連邦州に対して示した連帯は、歴史上類を見ないということです。ドイツ統一基金、州の金融調整、そして連帯協定から支出された資金、これらの資金がなければ、今日達成されたことは、不可能だったでしょう。

2004年に連帯協定の期限が切れたとき、東部ドイツの州がまだ自分たちの足で立つには程遠い状況なのは明らかであり、その後の経済的・社会的発展は不確かでした。だから、連邦政府と州政府は、2005年から2019年まで連帯協定を継続することを決議したのです。連帯協定を決定したことが正しかったのは、今日明白です。

イギリス在住の著名な社会学者ラルフ・ダーレンドルフは1990年、元共産主義国家が政治、経済、社会の建て直しを図るのに必要な時間を、次のように予言しています。民主政治と法治国家の導入に6ヶ月、市場経済への移行に6年、そして市民社会へと発展するのに60年、という見積りです。

この予測によると、まだ先は長いですが、私たちは予定表の中にいることになりました。ただ、東部ドイツは、ダーレンドルフのことは考えていませんでした。私たちは、特権を与えられた特別な状況にいました。私たちは、自由選挙が行われた後、ドイツ連邦共和国に政治統合されました。私たちは、時機に適した変革の第一歩を、自由・社会的法秩序を引き継ぐという形でやり遂げました。しかもこれは、かなりの程度安定してきました。公で取り組むべき課題は経済であり、国民は社会的に守られていました。いずれにしても、中央及び東ヨーロッパのほとんどの新しい民主政治の国とは比べようもありませんでした。

過去20年のドイツ統一のプロセスに対して、否定的、批判的、あるいは懐疑的な見方をするだけでもできれば、冷静に希望と感謝の気持ちを持って評価することもできます。一つ例を挙げます。この20年の間に、東部ドイツは、110万人もの人口減少を受け入れなければなりませんでした。これは、苦い経験です。270万人が西へと移り、それでも160万人が逆に西からやって来たのです。これは、新たにドイツが混ざり合ったということで、私はこれに賭けたいし、希望を託したいと思います。結局のところ、東から壁を押しつぶしたのは、東部の市民だけがそこに留まるためではなかったのですから。

私に言わせると、ドイツ統一は、歴史的な幸運です。私たちは再統一をして、自由な国に、統合された平和な大陸に暮らしています。その国境に関して、私たちの隣人たちが皆、賛成してくれたことを考えると、ある意味で友人たちに囲まれているということです。こんなことが、私たちの歴史の中で未だかつてあったのでしょうか。これを私は、大いなる歴史の幸運と呼びたいのです。ですから、私たちには、共に築いてきたことに対して、感謝の念と自覚を持って振り返る理由はいくらでもあります。1989年、1990年の大いなる幸福感が過ぎて、今私たちは通常のヨーロッパ民主政治の中にいて、正にこの世の日々の問題の解決に取り組んでいます。つまり、自由と民主政治体制に従事しているのです。これこそが、1989年以前に私がいつも望んでいたことです。

この機会に、日本の友人の皆様に、統一ドイツの発展を、はっきりと感じ取れるほどの共感を持って見守り、共に歩んでくれたことに対して、心からお礼を申し上げたいと思います。私たちと共に、ドイツ統一を祝ってくれた日本人が大勢いたこと、これに対しても感謝の気持ちでいっぱいです。

ご清聴ありがとうございました。